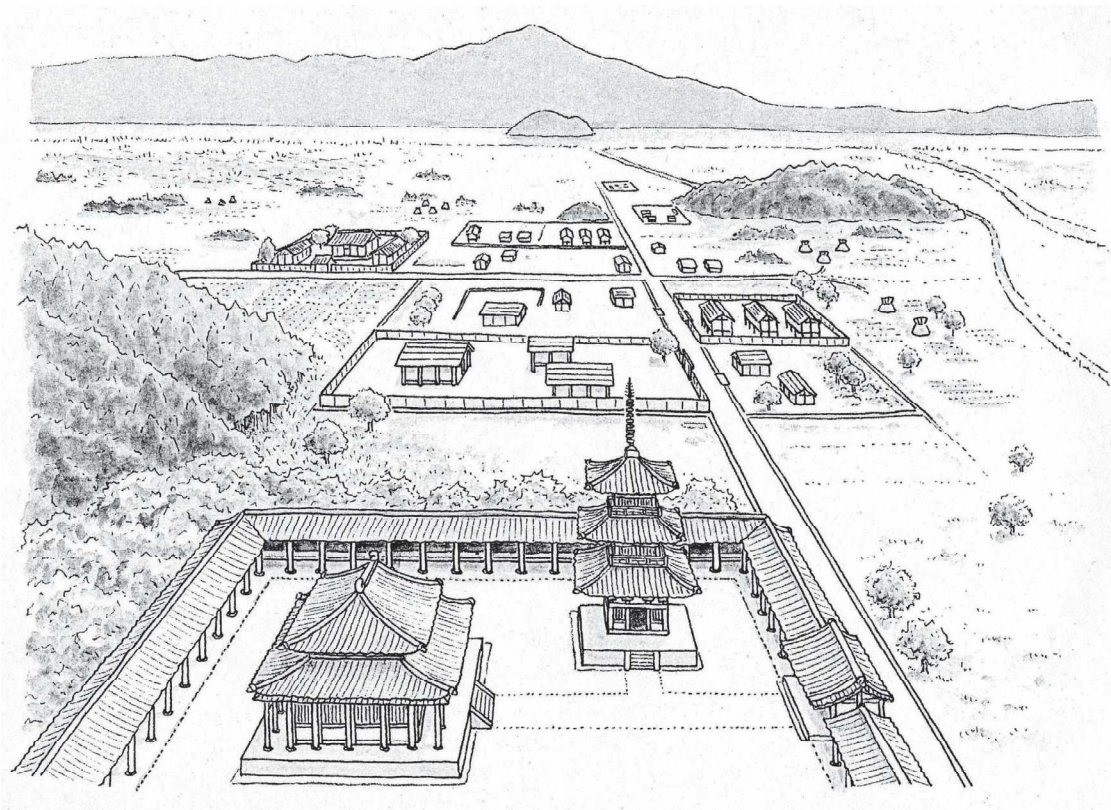


太陽信仰の聖地に造られた 日置前の遺跡



近江の最高峰で聖なる山「伊吹山」山頂から真西を望むと奥琵琶湖に浮かぶ聖なる島「竹生島」が、その延長上には5世紀代に築造された県下最大級の大規模円墳「王塚古墳」、奈良時代の都市遺跡「日置前遺跡」、そして日本で2例目の仏教彩色壁画が出土した「日置前廃寺」が真東西に一直線につながって存在しています。

春分・秋分の日には太陽は真東から昇り真西に沈みます。この時期に日置前の遺跡群に立つと伊吹山頂から太陽が昇り、夕方には「日を置く」と書く当地で太陽が沈みます。太陽の昇る山が聖山という意識、日奉信仰・迎日信仰は古墳時代にはかなり浸透していたと考えられており、日置前が太陽を招く（まねきよせる）太陽信仰の聖地ではなかったかと考えられます。

王塚古墳などの大型の古墳に葬ら

編集者のつぶやき

▼今回の表紙は、滋賀レイクスターズによるバスケット授業のようす。練習の最後には、ジョシュ選手の華麗なダンクシュートで児童らの拍手と歓声が沸き起こりました。▼特集は、獣害対策についてです。獣害は、全国的に問題になっていて新聞やテレビで目撃する機会も増えたように思います。人馴れしてきた動物は、住宅地に下りてきて事故を起こすこともあり、被害は農作物だけにとどまりません。地域みんなで対策しましょう。（広報担当S）

れている首長（集団の王）は、その集団の最高神でありました。この首長Ⅱ神は、太陽神と穀霊神の両神性をかねあわせており、毎年太陽の力が最も弱まり、穀物（主に粃）が越冬する冬至には、この神の生命もまた衰弱すると考えられ、盛大に生命Ⅱ霊の復活儀礼が行われました。しかし、本当に首長が死んでしまった時には、首長Ⅱ神の一生一代一度きりの首長霊の継承が古墳の上で行われるのです。この儀式は今日でいう大嘗祭であり、古墳とは死した首長と新しい首長がその神霊を継承する儀式の場だったのです。太陽霊を継ぐので、今でも棺のことをひつぎⅡ日継と呼んでいます。王塚古墳はこの儀式に最もふさわしい場所に築造された古墳であったといえます。（文化財課）



自然とともに生きる

高島市は、東部の琵琶湖岸を除く三方向が山に囲まれ、知内川、百瀬川、石田川、安曇川、鴨川等の大きな川が琵琶湖に流れ、その流域には豊かな土地が開けています。

また、市街地はJRの駅を中心に広がっていますが、山岳地帯や森林地帯、田園地帯、湖岸地帯に大きく区分することができ、「自然」豊かなまちといえるでしょう。しかし、この「自然」は、人の手が加わっていない自然なのでしょうか。



そうではありません。この「自然」は、私たちの先人たちが、自然の脅威にさらされながら、生活の安定や向上のために、森林や原野を切り開き、土地の形を変え、現在の姿になったものです。これは、私たちの先人たちが残してくれた「宝物」といえます。

ここでは、市内有数の川のひとつである安曇川を例にとりましよう。

安曇川は、幾度もの洪水のたびにあちろちろと流れを変えながら、上流から運ばれてきた土砂などを堆積し、下流に大きな三角州をつくってきました。

安曇川は、人々の生活に大きな被害をもたらしてきましたが、その一方で、なくてはならない存在でもありました。先人たちは、厳しい自然条件のもとで、この安曇川を利用し、その恵みに感謝をし、安曇川とともに生きてきました。

その一例として、災害防止の為

の植林から出発して、今日の伝統産業の一つになった扇骨づくりがあげられます。

扇骨とは、扇子の骨の部分のことです。『新旭町誌』や『安曇川町史』によると、江戸時代中期に現在の新旭町太田の長谷川玄斎が、堤防補強のために水防用として竹を植えることを農民に勧めたのが始まりとされています。

その後、同町新庄の戸島忠兵衛が植林を勧める一方、農閑期の副業として扇骨づくりを農民に勧め、自らも販路開拓を行ったといわれています。

現代に生きる私たちも、自然の脅威を受け止め、それを巧みに利用してきた先人たちの歴史を学びながら、住みよいまちづくりを考え、行動していきたいものです。

※ここで記述した「先人たち」とは、特定の人物ではない、「一般民衆のこと」をいいます。

(文化財課)

編集者のつぶやき

「あきらめない気持ち」が生んだサッカー女子ワールドカップの優勝。なでしこジャパンの大活躍に胸が熱くなられた方も多いと思います。このようなアツサは大歓迎ですが、この夏の猛暑は早く過ぎてほしいものです…。今年もステテコや、クレープシャツなどを活用し暑い夏を乗り切りたいと思います。節電の協力も大切ですが、くれぐれも、熱中症にならないよう無理をされないようお願いいたします。(広報担当S)



「高島音頭」を伝える 新資料発見!

高島市内に古くから伝わる盆踊り歌として知られる「高島音頭」は、現在も地域ごとの特色を残しながら、それぞれの地域の皆さんや保存会の人たちによって傳承され、8月から9月ごろにかけて各地で檐を囲んで盆踊りが行われています。

この「高島音頭」に係る珍しい資料が、先日、市内の個人宅で発見され、「高島音頭」伝承の一過程をうかがい知ることのできる資料として注目を集めました。

発見された資料のうち、和綴じ本の2冊は、文久3年(1863)の奥付がある「風流音頭集」と、同じころの作成と思われる「三下り音頭本」で、これらには「武者つくし」、「役者つくし」、「嶋つくし」、「十二月」といった、古い時代から用いられていたといわれる「高島音頭」の歌詞が「上・下」などの調子とともに書かれています。末尾には使用していた人の名前が書き入れられており、音頭をとる人にとって、貴重なテキスト

として大切に保存されてきたものであることが分かります。

また表紙に「高島音頭振興会関係書類」と書かれた簿冊には、現在今津町を中心に活動が続ける「高島音頭保存会」の前身である「高島音頭振興会」が、昭和10年代に受け取った出演依頼や、作成した書類の控え等が綴じられています。この中の内容を詳しく見ていくと、昭和11年8月12日に近江今津駅前で行われた盆踊り大会があり、江若鉄道臨時列車や臨時バスが運転され、花火が打ち上げられたこと

と、また昭和16年以降は、多賀大社や近江神宮の祭礼などに、「高島音頭」が奉納されるようになったこと等が分かります。さらに、この当時、作成されたと考えられる「高島音頭出演者注意事項」には、時代を反映して、歌詞は「伝統的日本精神ノ昂揚ニ資シ得ルモノヲ選」ぶことや、踊りは「国民の健全娯楽トシテ恥力シカラヌ様注意」することなどが書かれています。

ただ、そうした中でも、娯楽の少ない時代において、盆踊りの

は人々の大きな楽しみであったらしく、昭和10年ころからは、ラジオで「高島音頭」が全国に放送されることがたびたびあり、14年には、スタジオでの録音が海外放送にも使用されたことが記されています。

このように、何かのきっかけで残されていた資料から、これまで知られていなかった歴史の一部が明らかになるのは大変興味深いことであり、今回発見された資料は、「高島音頭」伝承の歩みを伝える貴重な資料として、市に寄贈されることになりました。(文化財課)

編集者のつぶやき

表紙は、下弘部区で開催された「どろんこフェスティバル」の様子。
東日本大震災をきっかけに、地域の助け合いの大切さを改めて認識され、もっと地域のつながりを感じてもらうとの思いで企画されたイベントです。暑い日差しの中、防災要素を取り入れた種目を、子どもからお年寄りまで泥だらけになって楽しんでおられました。地域のつながりが深まったことと思います。(広報担当S)



発見された「高島音頭」に関する資料。伝承の歩みを伝える貴重な資料として、市に寄贈されることになりました。
※9月7日(水)から30日(金)まで、マキノ資料館で展示。



六種の木

江戸時代に地方土産の一つとして全国に流通した「朽木盆」をはじめとする朽木のろくろ挽き物は、「六種の木」と呼ばれた木材によって作られていました。

トチノキ・ブナ・ケヤキ・カツラ・カエデ・ミズキなどの六種類の落葉広葉樹は乾燥が不十分だと狂いやすい材ですが、大径用材が豊富に調達でき加工が容易であったことからこれらの材が使われました。

木地屋は「山七合目半から上は木



▲トチノキの巨木

地屋のもの」などと標榜し、良材を求めて山中を漂泊しました。適材を採りつくすと次の山へ移動することが多いのですが、朽木は材が豊富であったことと、朽木藩の庇護を受けていたことにより木地屋が定着したようです。六種に制約されたのは朽木藩の林政制度に定められた範囲の木というのが真相だったようです。

全国の遺跡から出土した江戸時代の漆器碗の材を調査した結果によると、トチノキが約54%、ブナ約29%、ケヤ

キ約14%、カツラ約3%で、トチノキとブナの二種類で8割以上を占めています。

また、朽木のある農家に伝世した明治2年（1869）購入の箱書き紀年銘のある碗類の調査では、ブナが約7割、トチノキが約3割を占め、地域によって若干の差があるようです。

朽木生杉には、県下でも有数の植生の豊かなブナの原生林があります。昨年秋季には能家の山中で幹回り7メートルを超す西日本有数のトチノキが確認されました。これらの伐採は森全体の生態系を損ないかねず、琵琶湖の環境にも影響を及ぼす恐れがあるとして保全を求める活動が地元の方々や研究者などからなる「巨木と水源の郷をまもる会」によって進められています。

明治中頃に朽木の木地屋が絶えて以降、森はその植生を取り戻しつつある中、トチノキをはじめとする六種の木は「銘木」と呼ばれ、家具材や内装材として注目され、再び受難の時代をむかえています。

文化財課

030 4467

編集者のつぶやき

いよいよ冬本番が近づき、今年ももうすぐ終わろうとしています。年々1年が早く感じるのは気のせいでしょうか…？年末はいろいろ用事が重なり多忙な時期ですね。その用事の一つが大掃除。今回の特集では「ごみ減量大作戦」の取り組みや、紙ごみの分別について紹介しています。今年の大掃除は一工夫して、分別でごみを減らすように取り組んでみませんか。きっと資源に変わるものがあるはず。
(広報担当S)



近江と若狭を結ぶ 栗柄峠

マキノ高原マキノスキー場から赤坂山山頂脇を抜けて、福井県の実浜町新庄へ向かう山越えの道は、栗柄峠と呼ばれ、古くから近江と若狭をつなぐ主要な峠道の一つとして利用されてきました。峠の名前は、福井県側の麓に「栗柄」という村があったことにより、現在その村は美浜町大字新庄の一部になり、「栗柄」の地名はなくなっています。

この道は古代の官道である北陸道の一部とも考えられており、『延喜式』に記される北陸道の駅である近江国の鞆結駅と若狭国の弥美駅を結ぶ最短コースであるとも考えられています。

近江と北陸を結ぶ街道としては、マキノ町海津から追坂峠を越えて、越前敦賀に向かう北国海道（現在の国道161号）が有名ですが、この道は中世以降、主に琵琶湖と日本海の間を往来する物資の運搬ルートとして整備された道であり、徒歩で日常的に行き来をする人々は、出発地と目的地をで

きるだけ最短で結び、かつできるだけ歩きやすい峠道を選んで通ることが多かったと思われる。

この栗柄峠も近隣の村人たちの生活の中での移動に使われることが多かったと考えられ、現在、マキノスキー場から赤坂山への登山ルートを登り始めると、途中からところどころに古い石畳が残り、かつては多くの人々が歩いた道であったことが分かります。また、峠付近には自然石に彫られた地藏菩薩像や岩をくりぬいて置かれた



▲栗柄峠付近の石仏

石造仏が祀られ、峠越えの安全を願った人々の信仰心をうかがうこともできます。

水上勉の小説『湖の琴』には、福井県の栗柄村に住む主人公の少女が、三味線や琴の糸取り仕事のため、栗柄峠を越えて滋賀県にやってくる場面があり、その情景は「近江へぬける白い一本道の両側の山壁には、葉を落とした櫟の梢が針のように空へつき出ている肌寒い風が吹いていた」と描写されています。

風雪の厳しいこの峠道は、冬は当然雪に覆われることもあり、交通路としての役割は早くに終えました。近年では、春から秋にかけては高山植物が美しい登山コースとして、また冬にはスノーシューなどで雪山登山が楽しめるコースとしても、多くの人に知られるようになっていきます。

文化財課

☎(32)4467

編集者のつぶやき

▼表紙は、今津北小学校の伝統行事、左義長の様子です。代表の生徒が新年の誓いを述べた後に、着火。高さ約7メートルのやぐらが勢いよく燃え上がり、子どもらはかけ声とともに学業成就を願いました。▼私は初詣で家内安全を願いましたが、1月に県内でインフルエンザ注意報が発令され、早速心配に。手洗いやうがいなど健康管理につとめないといけませんね。節分には豆巻きをして無病息災を願いたいと思います。（広報担当S）



▲栗柄峠へ向かう道の石畳



新名勝指定！ 朽木池の沢庭園



▲今も残る遺水状の流れ

「お庭はお掃除が肝心・・・」。日本庭園の美しさは日頃の手入れと丹念な掃除によって維持されます。現在、古くから残る名庭園の多くは、長年の風雪や人による改変などにより、造られた当初の庭園景観は留めず、当初の姿を觀賞できないものがほとんどです。

朽木池の沢庭園は、高島市朽木村井に所在する平安時代末期～鎌倉時代前期（12世紀後半～13世紀



国道367号線

前半）の庭園跡ですが、当初の庭園の様子をよく残していることから、平成23年11月に国名勝「朽木池の沢庭園」として指定に向けての答申がされました。高島市内では朽木岩瀬の興聖寺境内にある「旧秀隣寺庭園」に続き2件目の国指定名勝庭園となります。

庭園の存在は古くから知られていましたが（詳細は「広報たかしまNo.13」参照）、造られた年代やどのような庭園であったかなどの詳細を明らかにする目的で、平成18～21年に市教育委員会が発掘調査を実施しました。

庭園は、安曇川の旧河道の窪みに山裾からの湧水を溜めて池を造り、露出する岩盤を築山の景色に取り込むなど、自然の地形を巧みに利用して造られていました。

池については、湧き出た水が緩やかに蛇行するように流れ、石組の落ち口から安曇川へ排水されます。池には、玉石と礫を盛り上げた細長い岬が造られ、岬の先端からは、岩盤を利用した荒磯風石組みを背景に、両岸を玉石礫によって意匠された池の全容を望むことができます。これら池を中心とする庭園は、饗宴の場として利用されることから、曲水宴（流れる水を浮かべて詩歌を詠む遊宴）などの儀式が行われていたと考えられます。このように平安時代末期から鎌倉時代前期の庭園の姿が、周辺の環境と共に良好に残っている事例はほとんどないため、日本庭園史の空白期を埋める貴重な事例として、国の名勝庭園として保護されることとなりました。これら当時の池の水の流れや石組みなどの庭園意匠は、現在でも自然林の中に顕在することから、四季を通じて庭園の姿を愉しむことができます。皆さんもいにしえの趣を残す庭園の姿を実感してみたいかがでしょうか？

図文化財課

☎(32)4467

編集者のつぶやき

表紙は、朽木スキー場30周年を記念して開催された「くつき雪まつり2012」のようすです。猪汁のふるまいやステージショー、雪上宝探し、スノーチュービング体験などが行われました。家族連れなどおよそ2,000人が訪れ、終日大賑わい。私もスキー場に行くのは久しぶりで楽しい気分になりました。スキー場の運営には雪が大切ですが、降りすぎるのも困りもの。日常生活に支障がない程度に適度に降ってほしいものです。（広報担当S）



▲朽木池の沢庭園の遠景

朽木・宮ノ前の春祭り

毎年4月から6月ごろには、市内各地の神社で春祭りが行われます。春祭りでは、その神社や地域によって、さまざまな形態の神事・祭礼行事・祭礼道具などが伝えられていて、各地で地域色豊かな祭りが行われています。

朽木・宮前坊の邇々杵神社では、毎年5月の第2日曜日に春の祭礼が行われます。

邇々杵神社は、宮ノ前に鎮座する、広い境内をもつ神社で、現在



も十禅師を祀る本殿と大宮を祀る河内社のほか、神宮寺の多宝塔などが立ち並んでいます。

ここで行われる祭礼は、朽木地域では珍しい神輿渡御などが行われる華麗なもので、その中で行われる神事や氏子たちによって用意される神饌物は、古式を伝えるものとして知られています。

神社の氏子は、集落の中心を通る馬場を境に上の組と下の組に分かれ、それぞれの組に祭りの当番が決められます。祭礼前日には、その2組の当番が神社で御幣や花びら餅、神輿に備える「野老」（山の芋科の植物。根がふくらんで芋のようになる。）などの準備を行います。この準備は幣挟みと呼ばれます。

当日は、午前中に拝殿で神事が行われ、午後からは太鼓の音を合図にお旅所に氏子一同が集合し、槍や鉦を持った役の人が神社まで行列を組んで進みます。そして、

神社に到着すると境内の入口付近の「お花畑」と呼ばれる場所を回って整列し、御神酒を全員で頂きます。その後、天狗面を先頭にして神輿（11神主役）や神輿を加えた行列が神社からお旅所まで渡しを行い、お旅所では、神輿が巨大な御幣を振る「幣振り」や花びら餅の振る舞いがあります。それらが終わると、お旅所から神社へ神輿が戻り、祭りが終了します。

神社に残る記録によると、以前は行列が神社に到着した後に、「流鏝馬」や「田鋤」などの行事があり、「流鏝馬」では錦の衣装に身を包んだ「弓馬」が、馬で走



神社を出発する神輿（平成19年撮影）

編集者のつぶやき

▼表紙は、安曇川町の松ノ木内湖でたなびく鯉のぼりの群れのように。松ノ木内湖再生協議会の役員らでつくる四津川湖土里会が、子どもたちの健やかな成長を願い設置されました。約80もの鯉のぼりは迫力満点で、道ゆく人々を魅了しています。▼今月号から、各コーナーのロゴをリニューアルし、新しく、男女共同参画のコーナー「さんかくだより」や、オノミユキさんのごみ減量マンガを掲載しています。ぜひご覧ください。（広報担当S）

こうした邇々杵神社の祭礼の特徴の一つに、大宮と十禅師それぞれの神輿2基が並んで渡御を行うことがあげられます。神輿の形態としても古い様式を持つこの2基は、昨年度、180年ぶりに全面的な修復が行われ、今年、5月13日（日）に行われる祭礼では、修復を終えた美しい神輿が渡御を行う予定です。（文化財課）

りながら的を矢で射抜き、「田鋤」では、農夫の格好をした者が、面白おかしく馬で田を鋤く真似をしました。こうした行事のため、祭りには、いつも5頭の馬が用意されていました。馬を飼う人が少なくなり調達が難しくなったことから、昭和30年代半ばから、馬を使わない現在の形になったということです。



広報たかしま

平成24年

5

月号

No.148

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒900-1004 滋賀県高島市新旭町北畑のり番地

☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.shiga.jp
✉tinfo@city.takashima.shiga.jp

今に残る江若鉄道の足跡

江若鉄道は、国鉄（現JR）湖西線の開通までの間、湖西地域を走る鉄道として住民に親しまれ、大正8年（1919）に株式会社として発足したときの計画では、その名前が示すとおり、滋賀県大津市と福井県遠敷郡三宅村（現・若狭町三宅）を結ぶことになっていました。設立にあたっての株式は8万株で、これを関係市郡に割り当てて株主が募られたため、沿線住民は、資産を売ったり生活を切り詰めたりして株式に応募したといえます。このことは、後に江若鉄道が「住民鉄道」と呼ばれ、多くの地域住民に愛され続けた理由の一つとなりました。

大正10年3月15日に、最初の営業区間として、大津市の三井寺―叡山間が開通した後は、資金の状況や工事の進捗に併せて、路線は少しずつ北へ伸びていきました。そして昭和2年（1927）12月25日に北小松―大溝（後に高島町と改称）間、昭和4年6月1日には大溝―安曇（後に安曇川と改称）が開通、昭和6年1月1日に北端の駅となる近江今津駅までの路線が開通しました。当初この区間は

昭和5年8月の開通が予定されていましたが、安曇川を渡る橋の建設に手間取ったため、開通が遅れたといわれています。

その後、江若鉄道は通学・通勤・買い物など地域住民に幅広く利用されたのはもちろん、物資の輸送列車として、また戦後のレジャーブームの頃には、湖西各地の水泳場やスキー場へ向かう人々を運ぶレジャー列車としても人気を集めました。

その江若鉄道も、昭和30年代初めに国有化の話が持ち上がり、40年代に入ると江若鉄道に代わる国鉄湖西線の建設計画が本格化していきました。

江若鉄道の線路敷は、約6割を鉄道建設公団が買収し、そこに国鉄の線路が建設されることになりました。湖西線建設工事は昭和42年に着工し、工事が本格化した昭和44年10月31日、江若鉄道はその役割を終えて廃線となりました。

現在、江若鉄道の大半の線路跡にはJRの高架線路が建設されていて、残りの部分もほとんどが道路になっていることから、列車が走っていたころの面影を残してい

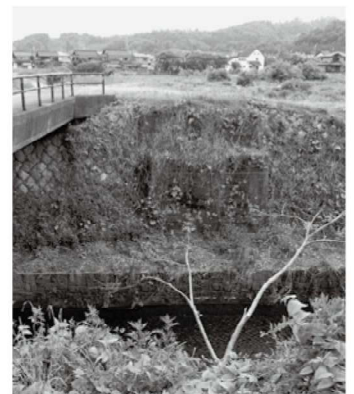
るところは少なくなりました。

ただ市内には、江若鉄道区間で唯一現存する近江今津駅舎があるほか、線路跡周辺を注意深く歩いてみると、川を渡っていた線路の橋台跡が残っているなど、江若鉄道の足跡をわずかに見つけることができます。

マキノ資料館で開催中の企画展「思い出の江若鉄道」（7月29日まで）では、こうした市内に残る江若鉄道の足跡を、当時の写真などとともに紹介しています。ぜひ、



江若鉄道近江今津駅舎



天川の橋台跡

編集者のつぶやき

表紙は、花しょうぶまつりのようす。写真愛好家の方や子ども連れの方たちが、咲き誇る花に魅入っておられました。花しょうぶの時期が終わると7月。本格的な夏が始まります。暑い夏にぴったりなのがステテコ。5月には高島ちぢみのステテコなどのファッションショー「びわ湖たかしコレクション」が開催され、華やかな舞台に多くの方が魅了されました。外着として着るようなオシャレなものもあり大変魅力的でした。（広報担当S）

文化財課

☎(32) 4467

ご協力をお願いします

最近、県内では地域に残る文化財（美術工芸品）の盗難事件が連続して発生しています。文化財所有者だけでなく、地域に住んでいる私たちみんなが防犯意識を持ち、地域の宝である貴重な文化財を守っていきましょう。

懐かしい「住民鉄道」の思い出を探しにきてください。

阿弥陀山と太山寺



阿弥陀山からの眺望

阿弥陀山は、比良山系の最北端に位置しています。標高454mの山頂からは、広大な平野や琵琶湖、条件がよければ対岸まで一望することが出来ます。

この山は、古くから西方浄土の信仰の対象とされ、地元の人々だけでなく、湖東の人々からも信仰されていました。

山麓にある三田集落は、かつて「弥陀」や「三田」の字に改めたとされています。「阿」は一本の道のこととされ、阿弥陀山が繁昌していた時の通行路であったことから、「弥陀（三田）阿」と呼ばれたと推測されています。また、三田集落の西方の共同墓地にある三昧鳥居は、阿弥陀山を西方浄土に見立てて、そこに旅立つための入口と伝えられています。

阿弥陀山の名前は、江戸時代に記された地誌『近江輿地志略』によると、昔、この山の上に阿弥陀山太山寺という寺があったことに由来します。太山寺は、聖徳太子の創建と伝えられ、のちに「高島七か寺」の一つにも数えられます。

す。中世の古文書である『朽木家古文書』には、元弘3年（1333）や建武2年（1335）、文明16年（1484）に太山寺の名が見られます。また、慶長7年（1602）の田中郷の検地帳には、実松坊、法泉坊、奥院、大仙坊、梅本坊などの地名が見られることから、中世には、多くの寺坊が存在していたことがうかがえます。中野の集落にある太子堂は、もとは太山寺の一堂でしたが、織田信長の焼き打ちに遭い再興されたものです。太子堂には、聖徳太子の絵伝や画像（高島市指定文化財）が残されており、絵伝の最後には、太山寺創建の一場面が描かれています。



本堂の基壇と礎石

編集者のつぶやき

▼7月27日に開幕したロンドンオリンピック。今回、どのようなドラマが展開されるのでしょうか？楽しみです。▼表紙は、市内6地域の子育て支援センター合同で開催された子育て講座「親子でふれあい運動あそび」のようす。会場にはさまざまな遊具が用意され、子どもたちは夢中で遊んでいました。体を使う遊びは、運動能力の発達に良い影響を与えるそうです。将来、オリンピックに出場する子がでてるかも？（広報担当S）

図文化財課

☎（32）4467

太山寺の遺構は、阿弥陀山の南側中腹の字名「阿弥陀山」、通称「御屋敷」と呼ばれる範囲に広がります。最高所に位置し、最も広い本堂と考えられる平坦地に向かって、石段の道がのび、その両側に坊院と考えられる平坦地が階段状に並びます。また、一帯には堀切や土塁など防御のための遺構も見られることから、戦国時代にも城郭として改修された可能性も考えられます。

本堂跡には、石積の基壇が残るとともに、礎石（建物の柱を立てる石）が整然と並び、見る人を圧倒します。



広報たかしま

平成24年

8

月号

No.151

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒500-0001 滋賀県高島市新旭町北畑のふり番地



0740 (25) 8000(代)

http://www.city.takahima.shiga.jp

mailto:info@city.takahima.shiga.jp

南市と安原仁兵衛

やすはらにへえ

高島市役所安曇川支所のある安曇川町田中の南市区は、古くから高島郡南部の政治・経済・交通の拠点として注目されてきた地域でした。

地域内の「立市」などの小字名からは、この地に市が立てられたことがうかがえます。また「南市」の名前の由来については、北海道沿いの宿場町の一つ「河原市」（現在の新旭町安井川）の南に位置する市だから、という説もありますが、はっきりしたことは

分かっていません。

記録上で名前が確認できるものとしては、東近江市に残る今から約500年前の「今堀日吉神社文書」の中に、高島郡の南市の商人が得珍保（東近江市に存在した荘園）の商人と荷物の運搬をめぐる争ったという史料があり、少なくとも室町時代ころには、南市の地に商人がおり、県内の他地域でも活動していたことが分かります。

江戸時代の南市村は、周辺の下ノ城・馬場・佐賀・上寺・薬師川各村とともに膳所藩領となり、郡内の膳所藩領を管轄する代官所がおかれていたことが知られています。村の石高は江戸時代を通して680石余で、村人の多くが農業に従事していました。一方で、江戸時代後半になると、河原市宿の助郷（宿場の人馬の不足を補う役）としての役割を担うようになり、このことによって村が困窮したという記録も残っています。

明治時代になると、南市村は周辺10か村と合併して田中村となり、中五反田に連合戸長役場が設

置されました。この役場は明治22年の町村制の施行により誕生した安曇村の役場にもなり、その後、周辺には、

学校、郵便局、駐在所、農会（後の農業協同組合）事務所、県農業試験場などの公共的な施設が次々と建設されました。

また、南市は政治家・事業家として郷土の発展に尽力した安原仁兵衛の出身地であることでも知られています。

安原仁兵衛は、南市の呉服商の長男として明治7年（1874）に誕生しました。29歳の時に単身で上京し、明治法律学校（現在の明治大学）に入学しました。卒業後は、帰郷して34歳のときに高島郡会議員に初当選し、その後は、安曇村長、県会議員、県会議員議長、衆議院議員を歴任し、その間、県の重要施策の一つとなっていた湖西鉄道の敷設に深く関わることになりました。大正7年（1918）10月に結成された湖西鉄道期成同盟会では委員長に就任し、続く江若鉄道株式会社の発足に力を尽くしました。

念願の鉄道敷設免許がおりたのは大正8年、その2年後に大阪の一部区間で営業が始まり、安曇駅



までの路線が開通したのは昭和4年（1929）のことでした。その後、仁兵衛は政界の第一線を退き、江若鉄道専務取締役として会社経営にも携りました。現在、JR安曇川駅前には、仁兵衛の偉大な功績を顕彰して、銅像が建てられています。

文化財課

☎(32) 4467

編集者のつぶやき

9月14日、安曇川中学校1年生の郷土学習「地域探訪」が行われ、子どもたちは、市内各地で高島の歴史や文化、産業を学習されました。表紙はそんな1コマ。楽農舎なごみの里代表の坂下さんから循環型農業の取り組みについてお話を聞いた後、ブルーベリーの木へ肥料をまく作業を体験。慣れない作業をがんばられました。こうした学習や体験を通じて地域の魅力を知って、郷土愛を深めてほしいですね。（広報担当S）